

日本靈異記研究序説

朝 枝 善 照

一 はじめに

日本靈異記の研究は、これまでに露木悟義氏の『日本靈異記研究文献目録』正・続^③、あるいは、国文学関係に特に留意された中田祝夫氏の労作『日本靈異記』所収の「主要参考文献」がある。このような研究文献目録を参考として、いささか関係カードを整理した拙稿も別に発表した^④。研究文献リストをカード化して行くと、仏教・文学・歴史・民俗等の各分野からこの日本靈異記、あるいは、著者景戒のことについて関心を持たれていることが窺える。

日本の仏教の歴史的研究は、古代の仏教の研究が最も研究の進んでいる分野の一つである。古代仏教史の研究の視点は、制度史から見ると、僧尼令の成立と国家の仏教受容の立場が一つの問題点となっている。かつての「皇国史観」から開放された古代史研究の中で、仏教の研究は、国家の仏教受容と仏教統制の意義に関する研究に大きな成果がみられ

る。それは、各論として、行基の研究などにみられる、僧尼令と仏教の戒律、あるいは、大陸の仏教の日本受容の一つの例として三階教との比較など、国家と仏教の関係構造について論じられたものが多い。このような政治と宗教の関係をテーマとすることは、書誌学的史料研究の成果を体系化して行くことになり、「歴史学」の本来の課題として重要な視点であった。

行基の仏教運動^⑤、古代仏教の寺院運営をふくむ制度化の過程など、個別研究にみられる成果は、戦後の古代史研究の大きな動向の中にその課題が設定されていることが窺える。研究はさらに、仏教受容の実際の在地での状況に関して各分野から成果が示されつつある^⑥。それは、民間仏教、あるいは、民衆仏教と呼ばれることもある。仏教の受容を古代社会の構造の中で理解しようとすると、史料として、六国史等が一応中心となる。しかし民間での仏教受容の実情について知ろうとする時、景戒の編集した、三卷、百十六話を収める日本靈

異記は重要な文献史料である。

二 日本靈異記の研究史

狩谷棧斎の『校本日本靈異記』の研究以来、本文としての校訂、前田家本、興福寺本、来迎院本などが学界に紹介されて、定本化の試みが続けられている。武田祐吉氏・遠藤嘉基氏などの研究が、中田祝夫氏や小泉道氏の研究に発展して、日本靈異記を史料として古代史研究に引用することを可能としてきた。

日本靈異記の研究に歴史学の分野から取り組まれたものとして、志田諄一氏の研究は初期の代表的なものである。そして、原田行造氏の研究は、説話研究の分野からの可能性を学界に示したものとなった。黒沢幸三氏の研究は、寺川真知夫氏など多くの研究者とは広い視野から興味深いテーマを設定して、『日本靈異記の世界』、さらに、『日本靈異記―土着と外来』の二編が刊行された。研究文献目録も完備したもので、今日の日本の日本靈異記研究の水準を窺せるものとなっている。また、神話との比較から守屋俊彦氏の研究、古代国家の伝承、文学の問題として多田一臣氏が興味深い研究成果を刊行されている。説話研究の分野からも多くの研究者が検討を試みているが、出雲路修氏の、説話集の内的秩序論は、説話集に表象された世界の指摘とともに有益な視点である。

他界観、あるいは、冥界、中国の先行書などとの関係について入部正純氏の研究が展開中であつたが、完結しなかつたのは残念である。

日本靈異記の受容された世界から、さらに靈驗記的な展開を見せた分野に関する研究に千本英史氏などの注目される成果が発表されている。

日本古代仏教史の研究の主力が国家と仏教の関係について、構造的に把握する視点で展開したことは、戦後の日本の歴史研究の流れの中に於いて重要な成果をみせた。さらに、各論として、受容されつつあつた古代の村落の中での実体について、前述の如く、これまでの古代仏教研究の史料として、日本靈異記が参照されてきた。日本靈異記を史料とした成果をみると、僧尼令によって、統制された仏教と、村落での仏教受容の実情との間に、若干の違いもみられる。所謂、たてまゑとしての仏教と、尼衆の期待した仏教のあり方、それが村落に生きた仏教であるが、その展開も詳細に分析してみることがある。

三 撰述の意義と史料性の問題

日本靈異記の撰述の意図、あるいは、撰述の意義に関する問題は、一方で、編集者となつた「景戒」の評価もふくむものであつた。この分野にも多くの成果が示されている。編者

であり、あるいは著述者ともなった景戒の生涯について、伝記的には、下巻第三十八話の後半部分、あるいは、百十六話の中にみられるある傾向、それは、紀州に関する説話、大伴氏族に伝承された物語が採用されていることなどから、紀州に縁の深い人、あるいは、大伴氏族系の人という説も出されてきた。また、渡来系の人物が多く活躍し、聖徳太子、聖武天皇、そして、行基に対しての讃仰の意が窺えるという論もある。研究史の文献目録を一読する時、この著者、景戒に就いて多くの研究者が注目しながらも、その史料となる部分がわずかであることから、どうしても推測に推測を重ねる結果となるようである。同時代に生活していたと考えられる。最澄や空海と比較する時、天台や真言という次の時代の仏教界の教学を担う人に対して、景戒は、結果として、奈良の薬師寺に所属した、「伝灯住位僧景戒⁽¹⁾」としての立場があった。

同時代人として、周辺の村落の人々に対して、善悪の現報を知らせることが、景戒の仏教伝道の目的の一つとなつてゐる。最澄や空海がいわば体制の外に於いて研鑽を続けねばならなかった時代に、景戒は、結果として伝統教団の中で一つの「革新」を志ざしていたように見受けられる。奈良の都の官寺の仏教教学の伝統の中に、自度の沙弥から、上昇を続けて「伝灯住位」を得たことを、景戒は率直に喜んでゐるようである。最澄が東大寺で見足戒を授かりながら、山岳の修行

者として『願文』を述作した状況は、景戒には思いもよらぬ世界であつたことであらう。光仁、桓武朝のの仏教政策と景戒の関係について窺うことの具体的な史料は見い出せないが、空海などともやはり違った、当時の在地の「常識的な知識人」としての風情が景戒の伝記から窺える⁽²⁾。

日本霊異記を史料として参照する場合、このような奈良末、平安初頭の時代の仏教政策と仏教界の動向に留意する必要がある⁽³⁾。日本霊異記の史料としての「有用性と限界」について明確な視点を持たないことには、現代の歴史学の中では通用しないものとなるであらう。河野勝行氏⁽⁴⁾、井上正一氏⁽⁵⁾、仲尾俊博氏⁽⁶⁾の日本霊異記に対する分析は、重要な視点となるべきものである⁽⁷⁾。

四 村落での伝道活動

景戒は、独立した仏堂をもち、馬を二頭所有していたことなどが知られてゐる。景戒のような自度の沙弥の日常を窺せる史料は少ないけれども、夢の中に出てゐる「沙弥鏡日」の記述は、一つの例として沙弥の様子を窺うことができる。

然して寝テアル子の時に、夢に見る。乞食者、景戒が家に来りて、経を誦し教化して云はく、「上品の善功德を修すれば、一丈七尺の長身を得む。下品の善功德を修すれば、一丈の身を得む」といふ。爰に景戒聞きて、頭を廻らして乞人を睨れば、紀伊国名

草郡の部内楠見の栗の村に有りし沙弥鏡日なり。⁽²²⁾

右の夢の記述は、乞食者として托鉢する僧の存在、その托鉢のあり様は、經典を誦誦して、その後短い「法話」のような説法をなしている。鏡日の伝については、未詳である。

景戒の親しい知人のような書きぶりでは、景戒は、この鏡日との夢中間答を記す中に、「爰に景戒言はく、斯の沙弥、常は乞食する人に非ず。何の故にか乞食する、といふ。」⁽²³⁾という。沙弥の中にも、「常は乞食」しない人もいたようである。景

戒は右の夢中の問答を仏教教学の世界に於いて解釈することを試みている。内容の事実関係は別として、修行者がこのように路港に出没することが僧尼令で禁止された行為であった。景戒の座右には『諸教要集』の一部が「反故」紙に書写されていたのであろうか。この時代に、紙・筆・墨を所有し、書写できる生活を景戒がなしていたことを示している。

景戒は、延暦六年九月四日のこととしてこの夢を記述している。その九月四日に、景戒は自身の日常を反省して漸愧の心を発して次のように言ったと記す。

嗚呼恥しきかな、羞シかな。世に生れて命を生き、身を存ふることに便無し。（中略）俗家に居て、妻子を蓄へ、養ふに物無く、菜食も無く塩も無し。衣も無く薪も無し。毎に万の物無くして、思ひ愁へて、我が心安くあらず。昼も復飢ゑ寒ゆ。夜も復飢ゑ寒ゆ。（以下略）⁽²⁴⁾

景戒は俗家に妻子とともに生活をしていながらも、仏道修行は目ざしているようで、「憂愁へ嗟^{なげ}キテ」いる。「万の物無くして」夜も昼も「飢え」に苦しむと記述する。これは景戒の述べるところであるが、下巻第三十八話に記述される景戒の生活の全体から判断するならば、当時の世相と比較して、かなり富裕な層に属すると思われる。日本靈異記には、このような村落の小堂で伝道を続ける自度の沙弥がかなり写実的に描写されている。

沙門弁宗は、大安寺の僧なりき。天年弁有りき。白堂を宗とし、多く檀越を知り、高く衆の氣を得たりき。⁽²⁵⁾

右の沙門弁宗の物語は、「白堂」を宗とすと記述されている。弁宗は、「天年有弁」と多くの信者の衆望をになつたようである。「白堂」という、本尊仏に願いごとを取り次ぐことを職務としていたとされる。この弁宗は、自度の沙弥ではなく、大安寺の僧であるが、大修多羅供の錢、三十貫を借り受けてその返済に行きづまったようである。弁宗のような「白堂」という職務については、従来あまり注目されることもなかったが、行基の説法を聴きに来る多くの信者の様子など、景戒の周辺にも村落に在住して伝道する僧が多数存在したことを窺せる。彼らがどのようなにして、仏門に歸し、仏教の教学を学んだものかよくわからないけれども、従来の国家と仏教の関係を僧尼令で分析する視点の延長に弁宗のよう

な僧も存在していたようである。景戒の実像は史料的には不明に近いけれども、百十六話の説話を編集したことによって、多くの自度僧(私度僧)の存在を後世に伝えることとなったようである。

次に、村落での伝道活動を物語の中から具体的に取り出してみると、日本霊異記の世界では、齋会、屈僧、悔過、読経、写経、造仏、造画、放生、齋食など、僧尼令による仏教統制に支えられた官寺の仏教とは違った信者集団による多彩な宗教活動がなされている。僧俗の交流も、乞食や知識も日常になされたであろうが、「碁」を打つことを宗とした自度の僧もいた。このように、村落で営まれる寺院の活動が、たとえば行基の大規模な土木事業を可能としていた原点の一つであったことを知らされるものである。

日本霊異記の説話で注目される活動の一つに「看病禪師」がある。「看病」の実体についての研究が十分になされているわけではないが、国家的な規模に於いても実行されている。宮城洋一郎氏は、仏教による援助活動として、光明皇后の諸事業を分析した。また、国家とは違った立場ではあるが、官寺の僧団の中に於いても看病の伝統は存在したようである。直林不退氏は、戒律と日本の仏教教団の僧伽の伝統の中での看病について検討をしている。日本霊異記には、上巻八・十一・十五・二十六・三十一、中巻四十一、下巻二・十

一・十二・二十一、三十四・三十六の十二例に病人が色々な方法で看病されている説話が記載されている。看病禪師として活動する僧にも、官僧として任命される正式な職務とみなされる例もあるが、このような景戒の周辺で、活動する禪師や薬師や行者は、古代社会で多くの人々に仏教がどのような期待を持たれていたかというものを窺わせる。

日本古代の仏教の受容の過程を考えると、国家の立場で官寺に官僧が存在するという形式で受容され、その基盤として僧尼令が機能するものである。しかし、仏教の戒律、あるいは、仏教の教学が国家の理解する僧尼令の枠の中で治まらないことも事実である。最澄や空海の活動を僧尼令に当て嵌めてみるとよくわかる。『顯戒論』の主張は、日本仏教の伝統の中に、出家者の主体性を確立することになった。行基が村落の中で伝道を続けたこと、景戒のような自度僧、国家からは私度の沙弥と蔑まれながらも、「娑婆」に生き続けた伝統は、仏教の教理からみれば、本来的な存在であった。景戒には、「伝灯住位僧」として、僧尼令統制仏教圏に自己の立場を求めようとしているが、自誓受戒による自度の僧の存在は決して蔑まれるものではなかった。しかし、景戒は、このような最澄の教学について理解することはできなかったようである。下巻の巻末に、「未得天台智者之甚深解」と述べるのみである。しかし、日本霊異記の中に展開される村落

での伝道活動は、結果として、最澄の主張、あるいは、空海の山岳修行と結びつくものであったようである。景戒とその周辺の沙弥が意識していたとも考えられないけれども、実体としては僧尼令をはるかに超克した伝道活動が展開されていることが知られる。

五 結びにかえて

日本靈異記を通じて、日本の古代社会を分析する時、説話、伝承、あるいは村落での仏教伝道活動の実体など、かなりの分野で具体的な状況を知ることができる。多くの研究成果が示され、仏教・歴史・文学などの広い視野から、景戒とその周辺の世界に現在も研究が続けられている。撰述の意義、史料としての有限性の検討、教学の特色、説話の背景にみられる当時の社会相、たとえば、看病禅師の民間での活動状況など、日本靈異記のもつ重要性は尽きることのない多くの問題点を提示し続けている。かつて、「娑婆の文学」として、この日本靈異記が呼ばれたことがある。確かに、奈良時代の正史や官寺の歴史に見られない、村落での「陰身の聖」の活動が知られるものである。大きく政治と宗教、あるいは、国家と仏教という課題で分析される、所謂、表面的な仏教受容の歴史の中で、僧尼令を超克した村落に生き続ける仏教の伝統をみることによって、より本質的な日本古代社会で

の仏教受容の実情が把握できる。「娑婆の仏教」を通じて、官寺や官僧の実体、あるいは、時代の流れ、最澄や空海が突然に出現したものでないことも、この日本靈異記の世界を通してみることによって、より顕らかなるものであろう。

- 1 『上代文学研究会報』第十八・第二十一号。
- 2 朝枝善照著『日本靈異記研究』参照。
- 3 宮城洋一郎著『日本古代仏教運動史研究』参照。
- 4 直林不退著『日本古代仏教制度史研究』参照。
- 5 中井真孝著『日本古代の仏教と民衆』などに代表される研究がある。
- 6 中田祝夫校注・訳『日本靈異記』(『日本古典文学全集』所収)。小泉道著『日本靈異記諸本の研究』。
- 7 志田諄一著『日本靈異記とその社会』。
- 8 原田行造著『日本靈異記の新研究』参照。原田教授の四十七歳というのはあまりにも早世というべきであろう。いつの頃からか書簡を拝していたが、遂に直接の声咳に接することのできなかったことは残念である。遺著に接する度に感慨無量である。
- 9 黒沢幸三代表、日本靈異記研究会編。
- 10 守屋俊彦著『日本靈異記論―神話と説話の間―』。
- 11 多田一臣著『古代国家の文学 日本靈異記とその周辺』。
- 12 出雲路修著『説話集の世界』。
- 13 入部正純著『日本靈異記の思想』。
- 14 千本英史「験記ジャンル作品の可能性」(『説話文学研究』所収「シンポジウム・験記の世界」)参照。
- 15 『日本靈異記』巻下の署名参照。中田祝夫校注本『日本靈異記』

異記』(『日本古典文学全集』所収) 三六八頁、脚注二、「僧侶には、伝灯大法師位・伝灯満位・伝灯住位・伝灯入位が設けられていた。」とある。

16 朝枝善照『Characteristics of the Nihonryōiki and the Author Kyōkai』(『国史学研究』第四号) 参照。

17 朝枝善照著『平安初期仏教史研究』第一部「平安初期の政治と仏教」参照。

18 河野勝行著『日本の障害者』参照。

19 井上正一『『靈異記』にみる「業」思想の民間受容』(『部落解放研究』第三五号) 参照。

20 仲尾俊博著『靖国・因果と差別』参照。

21 朝枝善照著『日本靈異記研究』第一部。

22 中田校注本『日本靈異記』三六四頁。

23 中田校注本『日本靈異記』三六五頁。

24 この書名について諸説があるが、『諸経要集』であろうか。

25 中田校注本『日本靈異記』三六三頁。

26 中田校注本『日本靈異記』二六七頁。

27 上巻第十九話、中巻第十八話

28 朝枝善照『日本古代に於ける仏教伝道の一考察——とくに『日本靈異記』に見られる伝道者と檀越について——』(『仏教文化研究所紀要』第二十六集) 参照。

29 宮城洋一郎「光明皇后の悲田院・施薬院をめぐって」(『西光義敏編『援助の人間関係』所収) 参照。

30 直林不退「日本古代の僧団における看病——天武八年十月は月条の勅をめぐって——」(『西光義敏編『援助の人間関係』所収) 参照。

31 朝枝善照「看病禪師考」(『西光義敏編『援助の人間関係』所収) 参照。

日本靈異記研究序説(朝 枝)

収) 参照。

32 朝枝善照著『平安初期仏教史研究』参照。

△キーワード△ 景戒、日本古代仏教史、靈異記研究史

(龍谷大学教授)

お知らせ

日本印度学仏教学会データベースセンターの住所が左記のとおりに変更になりましたのでお知らせ致します。

記

〒113 東京都文京区本郷三丁目三十三番五号

東京大学仏教青年会内

日本印度学仏教学会データベースセンター

☎ 〇三五六八四—八六一二